

柿沼 唯（作曲家） Yui Kakinuma

武満 徹（1930～1996）

弦楽のための3つの映画音楽

音楽が喚起するイメージを独自の語法で追求し、20世紀を代表する作曲家の一人として世界的にその名を認められた武満徹は、すぐれた映画音楽の書き手でもあった。年間100本以上を観たという無類の映画好きでもあり、映像の世界に通曉していた彼が映画のために書いた音楽は、前衛的な実験音楽からすぐれて抒情的なものまで、その多彩な才能が発揮された魅力的なジャンルといえる。そんな映画音楽の成果を演奏会用に仕立てた作品が、この「弦楽のための3つの映画音楽」である。この作品は1994年にスイスの音楽祭のために作曲者自ら弦楽合奏用に編曲し、1995年にウィリアム・ボウトン指揮イギリス弦楽合奏団により初演された。ジャズの要素やクルト・ヴァイル風の雰囲気などを巧みに織り込んだ3つの小品には、類い希なセンスが光る。

第1曲『ホゼー・トレス』より「訓練と休息の音楽」は、ボクシングをテーマにした勅使河原宏監督のドキュメンタリー映画（1959）の中の1曲。

第2曲『黒い雨』より「葬送の音楽」は、井伏鱒二の広島原爆を主題にした原作による、今村昌平監督作品（1989）の中の1曲。

第3曲『他人の顔』より「ワルツ」は、安部公房の原作による勅使河原宏監督作品（1966）の中の1曲。

ショスタコーヴィチ（1906～1975）

ピアノ協奏曲 第1番 ハ短調 Op.35

ショパン・コンクールで名誉賞を贈られるほどの優れたピアニストであったショスタコーヴィチは、2曲のピアノ協奏曲を残しているが、その最初の作品であるこの第1番は、1933年の初演以来ショスタコーヴィチがピアニストとしてたびたび演奏した曲であった。そこにはソ連という共産主義国家に生きる芸術家としての苦悩を知る前の、冗談好きで、愉快な悪戯や機知に富んだパロディを愛した若きショスタコーヴィチの人となりが見られる。随所に見られる音楽的コラージュの手法はそのよい例で、この曲にはベートーヴェンからハイドン、グリーグ、マーラーにいたる、過去の大作曲家の作品を暗示するモチーフが形を変えてちりばめられ、その変化に富んだ音楽にスパイスを効かせている。また、この曲は楽器編成が変わっていて、オーケストラは弦楽合奏+独奏トランペットという、他には見られないものである。

曲はすべて続けて演奏される4つの楽章からなる。

第1楽章アレグロ・モデラートはソナタ形式で書かれているが、第1主題の動機にはベートーヴェンの「熱情ソナタ」が借用されている。

第2楽章レントは、もの悲しいワルツとして始まるが、パロディを含む大袈裟な表現が独特のアイロニカルな雰囲気を醸し出す。

第3楽章モデラートは、練習曲のようなピアノに、弦楽合奏が重厚な響きで応える短い間奏曲。

第4楽章アレグロ・コン・プリオには、大衆歌から古典作品まで様々な借用やパロディが散りばめられている。主題とカデンツァは、ベートーヴェンのピアノ曲「ロンド・ア・カプリッチョ『なくした小銭への怒り』」のパロディ。猛スピードで疾走するスリリングな展開でショスタコーヴィチの独壇場となる。そして終結部ではトランペットが軍隊ラッパさながらに同じモチーフを連呼して、ベートーヴェンを振ったような主和音の連打で終わる。

チャイコフスキー（1840～1893）

ヴィオラと弦楽合奏のための「夜想曲」（6つの小品 Op.19より）

チャイコフスキーならではのロシア的な憂愁に満ちたメロディには、弦楽器の音色がよく似合う。チャイコフスキー33歳の頃に作曲されたピアノ曲「6つの小品」Op.19の第4曲「夜想曲」も、作曲者自身がチェロとオーケストラのために編曲した版で親しまれている名曲だ。今回はヴィオラ独奏と弦楽合奏での演奏。哀愁を湛えた、民族の調べともいうべきメロディが奏でられて始まり、中間部は朗らかな曲想の3拍子に転じて変化を生み、再び哀愁のメロディがオブリガート旋律をともなって歌われる。

チャイコフスキー

弦楽セレナーデ ハ長調 Op.48

ロシアの作曲家の中では「西欧派」とも呼ばれ、西ヨーロッパの音楽から多くの影響を受けたチャイコフスキーは、中でもモーツァルトの音楽に深い愛着を抱いていたと伝えられる。弦楽合奏の人気曲として、今日広く親しまれているこの「弦楽セレナーデ」は、そうしたチャイコフスキーの西ヨーロッパ的な作風を象徴的に表した作品と言われている。この曲は1880年、チャイコフスキー40歳の年の秋に、ウクライナ地方のカメンカという町に滞在中に作曲された。実際にモーツァルトのセレナーデを、どの程度意識して書かれたのか定かではないが、その第1楽章は確かに、モーツァルトへのオマージュともいえる内容をそなえている。しかし、モーツァルトの室内楽的なセレナーデとは違って、この曲ではより規模の大きな弦楽オーケストラがイメージされているところや、優美なワルツや憂愁に満ちたメロディなどが登場するところは、交響曲やバレエを得意としたチャイコフスキーならではのスタイルであり、全体的にはロシア的魅力にあふれた1曲といってもよいだろう。

第1楽章アンダンテ・ノン・トロppo ― アレグロ・モデラートは、「ソナチネ形式の小品」と題された西欧の香りに満ちた楽章。

第2楽章モデラートは「甘美に、かつきわめて優美に」と指示されたチャイコフスキー特有のワルツである。

第3楽章ラルゲット・エレジアコは優美な悲しみを感じさせるエレジー。

第4楽章アンダンテ ― アレグロ・コン・スピリットには「ロシアの主題による」と但し書きされ、2つのロシア民謡が登場する。